広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

鋳造ガラスの造形美を世界に発信

矢作 理彩子　大阪／硝子造形家

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催・LEXUS）は、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

本プロジェクトは２０１６年、放送作家として「料理の鉄人」などの多くのヒット番組を手がけ、またくまモンの生みの親でもある小山薫堂氏をプロジェクトのスーパーバイザーに迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。

昨年度は、52名の匠によるプロダクトが誕生。若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への採用や、ロックフェラー家主催のチャリティイベントへ出品されるなど注目を集め、匠自身もＴＶやｗｅｂメディアへの掲載など目覚ましい活躍を見せている。

２年目となった今年は、全国47都道府県から計51名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ね、途中経過のプロダクトをうけて行うエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの試作に取り組んだ。

1月17日に都内で行われた商談会では、百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて半年間をかけて製作した自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。また、商談会の終盤ではビームスジャパンとのコラボレーション企画「LIFE with NEW TAKUMI～新しい匠、新しい暮らし～」が発表されるなど、プロジェクトも進化している。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。大阪府選出の匠、硝子造形家の矢作理彩子さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

1月17日 プレゼンテーションにて

作品をプレゼンする矢作さん

展示ブースでバイヤーに説明

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

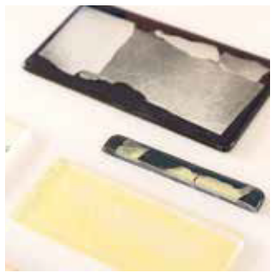
1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。伝説の深夜番組「カノッサの屈辱」でその名を世間に広め、「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

キルンワークで「変化」を美に昇華

矢作さんは板ガラスのパーツを組み合わせ、電気炉（キルン）で焼き上げるキルンワークという技法を主体に、アート作品等を制作する硝子造形家だ。今回のプロジェクトでは、バングル用の石膏型に、短く切った板ガラスのパーツを詰め、銀や銅など の金属箔を合わせることで、形と色の「窯変」を生かしたバングルを制作した。「ガラスが熔けかかったところで鋳造を止めて素材の形を残すことと、焼成温度による金属箔の色の変化を考えてキルンに入れますが、出てくるまでどんな作品に仕上がっているかわかりません。私の作為を超えた窯変に、制作の面白さがあります。全てが一点物というところも、このバングルの魅力だと思います」。

プロジェクト参加当初は売りやすさを考え、ガラスと金属箔を合わせて鋳造した長方形の作品を金属のバングルに貼り合わせたものを提案しようと考えていた。しかし、エリア・コンサルティングで試作品を見た下川氏から「より遠くに飛ぶことを目指して、もっと自分らしい作品を作ったほうがいい」というアドバイスを受けて、新たな挑戦を決意した。「価格は高くなりますが、バングル全体を鋳造ガラスにし、外の光を取り込んで表情を変えるガラスの美しさに焦点を当てた作品にしました」。

プレ・プレゼンテーションでは、生駒氏より、「バングルの片側のラインが直線だが、上下ともに不定形の作品もほしい」というアドバイスを受けた。これは技術的に難題だったが、なんとか結果を出したいと考えて工夫を凝らし、要望に応える作品を作った。「多くの方のアドバイスを受けて完成した作品は、アートとプロダクトの中間のものになり、満足しています。今後はこのバングルの受注生産と私が新規にデザインする作品の二本立てで販売し、斬新な美しさを求める国内外の女性に身につけてもらって、鋳造ガラスの表情や感触を味わってもらえたらうれしいですね」。


金属箔で窯変したガラス

完成プロダクト「fragmentum」

ガラスの奥深い魅力を追求した作品

硝子造形家として15年近いキャリアを持つ矢作さんは、病院やホテルを飾る大型のアートや作品を制作する傍ら、アクセサリーや帯留めに鋳造ガラスを あしらった手に取りやすいプロダクトを作ってきた。制作の過程で大事にしているのは、キルンワークの技法を通して、単体でも十分に美しいガラスの より深い魅力を引き出すこと。そのために、金属箔を組み合わせるなどの工夫をし、ガラスの個性と自分の個性を融合させた作品づくりを心がけている。

「制作に際しては、大阪ブランドの耐熱石膏型を使い、大阪のガラスを使ったりもしています。私は千葉県生まれですが、大阪に長く住んでいますので、華やかで大ぶりなデザインを好む大阪の美意識にも啓発されています」。

レクサスのプロジェクトに参加して改めて感じたのは、挑戦することの大切さ。矢作さんにはアートに近い作品は日本では売れないという固定観念があったが、今回多くの人がこのバングルに興味を持ってくれたことで、自分で自分の道を狭くしていたと痛感したと言う。若い作家たちを勇気づけるためにも、好きなモノづくりをビジネスとして成立させることが大事という矢作さん。「今後は、ミラノの見本市に持って行くなど、海外を視野に入れた販売展開を考えたい」と、次のステップへの意欲に燃えている。

エリア・コンサルティングにて
左：矢作さん、右：下川 氏

工房にて作品づくりに打ち込む

矢作 理彩子
大阪／硝子造形家

千葉県船橋市生まれ。奈良大学でササン朝ペルシャのガラスの制作方法を研究。卒業後、東京ガラス工芸研究所に入所しガラス制作全般の技法を習得。同研究所修了後、電気炉を使った鋳造技法であるキルンワークと呼ばれる技法を主体として制作活動を行う。現在、ガラス工房「Glass Studio ARGO」を主宰し、講座やレンタルスペースとしての運営を行う。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT